Research Paper

Theravada vs. Zen Buddhism: Model-dependent Realities

Tadao Miyamoto*
Director of the Research Center for Language, Brain and Cognition, Tohoku University

Abstract

Employing Stephen Hawking's idea of 'Model-dependent Realities', I argue that the Buddhism concerns to a large extent with our incapability of perceiving the world which appears at our sensory level of seeing, hearing etc. This incapability has to do with the fact that we are not accustomed to viewing the sensory world, since the brain is so clever at creating so-called objective world based on 1) the 'impoverished' sensory information and on 2) its own hypotheses and speculations of so-called objective world. What Zen and Theravada Buddhism tell us is that, for detachment's sake, we should become capable of viewing the impoverished sensory world as it is, and at the same time should become capable of comparing this world to the world our brain creates. In this sense, there is no difference in the essence of teaching between these two types of Buddhism.

Keywords: Theravada, Zen, model-dependent, sensation, realitieses

* Corresponding author e-mail: professortadaomiyamoto@yahoo.co.jp

17-27.indd 17 3/21/12 8:53 AM

南方上座部仏教と禅:モデルに即した現象

宮本正夫
東北大学大学院国際文化研究科・教授
附属言語脳認知総合科学研究センター・センター長

1. はじめに

1.1 トークの目的

このトークの目的はTheravada仏教と禅仏教との共通点は何か、すなわち仏教のエッセンスは何かを概観することであり、二つの異なった仏教を歴史宗教学的な観点から考察するものではない。それら二種は、カタチ上ではまったく異なった教えではあるが、その神髄・エッセンスはまったく同じであると述べる。この目的を果たす為に、物理学者・Stephen Hawkingの量子論の最近の著書から、一概念を借りる。それは「Model-dependent Realities」と呼ばれるもの。それは、この世には絶対的に存在するものはなく、見る人の立場、すなわちモデルに即してモノは存在するものであり、見方・見方によって見える世界はそれぞれ異なると説くもの。この概念を借り、「TheravadaとZenに共通する仏教のエッセンスとは、我々が瞬時・瞬時に経験する現象(realities)をあるがままに観ること・理解すること」であると述べる。(「Realities」を「事実」あるいは「真実」ではなく「現象」と訳させてもらう。「実際に経験し得る現象」、「実際に存在する現象」との意味である。)更には、それら現象のあり方を理解してもらう為に、脳科学・心理学の基礎的な概念をも借りる。

このトークで一つユニークなことを述べるとすれば、それは次のこと。脳科学・心理学的概念を借りれば、「世界」と呼べるものには三種あると言い得る。すなわち、1)「いわゆる客観的な世界」、2)「感覚器官に直接現れる世界」そして 3)「脳が自らの仮説・推論に基づいて造りあげる世界」。仏教では、1)の世界は「検証不可能な世界」、2)の世界は「観るべき世界」、そして 3)の世界のかなりは「架空の世界」と説く。仏教的価値観を付せて言い直せば、私達が実際に存在すると思う「いわゆる客観的な世界」は、直接には経験することは不可能な世界。なぜなら、我々はそれを、五感を通じてしか取り入れる事ができないし、五感は情報処理におけるbottle-neck。実際に五感覚器官で現れる世界は実に貧弱(impoverished)なものでしかない。この「Bottle-neck 的な世界」から、我々を「いわゆる客観的な世界」の正確な写しと思える世界を仮説・推論に基づいて頭の中でかってに造り上げているのである。しかし、実際に我々が経験し得る世界は、その三つの世界の内でたったの一つ。この「情報的には非常に貧困(impoverished)な五感レベルでの世界」を観ることができれば、それは、なんら、執着に値するものではないと悟り得る。これが上の(2)の「感覚器官に現れる世界」、「情報処理のbottle-neck 的世界」を観ることの仏教的意義である。

ところで、仏教を「二輪車」に喩えることが可能だと思う。一輪は、輪廻の概念に基づいた倫理

17-27.indd 18 3/21/12 8:53 AM

思想。後一輪は、上で触れた瞬時・瞬時の現象をあるがままに観る知恵に関わる教え。断っておくが、このトークは、後者すなわち仏教の認知科学的側面に光を当てるものであり、前者すなわち仏教の宗教的な側面に触れることはない。

1.2 人差し指の実験

メイン・テーマについて述べる前に、一つ簡単な「実験」を行ってもらいたい。自分の右手の人差し指で、左手の人差し指に触れてもらいたい。何回か繰り返してもらいたい。その間に、また、何回か目を閉じたり開いたりしてもらいたい。実際の右手の人差し指と左手の人差し指で現れるものは何であろうか。それはもはや「指」ではなく、たんなる「柔らかさ」、「暖かさ」ではないだろうか。更にまた、目を何度も閉じたり開いたりして気づくかも知れないことは、見ているものは「人差し指」ではなく、単なる視覚情報ではなかろうかとのこと。ともかくも、このトークの最後で、「自分が自分の指に触れている」との思いに少しでも疑問を持って貰えたならば、私のトークの目的が達せられたことになる。

1.3 トークの流れ

以下がこのトークの流れである。第二セクションで、「Model-dependent Realities」の概念を紹介する。第三セクションで、禅、特に、臨済禅を紹介する。第四セクションで、脳科学・心理学の基礎概念を紹介する。第五セクションで、仏教を「ボトルネック・モデル」として捉える。第六セクションで、Theravada仏教を簡単に紹介する。第七セクションで、上で述べたことをまとめ、このトークをしめる。

2. ホーキングの量子論

仏教ほど科学的な宗教はないと言ってもよいであろう。確かにそれは宗教的な要素を持つ。しかし仏教は、認知科学的な要素を前提にした教えであり、それを抜きにすれば、その価値を失う。このトークでは、その認知科学的な内容とは何か示す為に、物理学者・Stephen Hawkingの最近の著書から、「Model-dependent Realities」と言う概念を借りる。その著書とは、Hawking, Stephen and Leonard Mlodinow. (2010). ***The Grand Design.*** London: Bantam Pressである。(Hawking & Mlodinow (2005)をも参照)

2.1 二種の科学(誤った考え)

私自身、以前ある脳科学の本を読んだ時に、科学には二種類あると教えられた。すなわち、物理学のように「客観的な外の世界」を扱う科学と、脳科学のように「知覚認知主体と外の世界の関わり」を探る科学との二種類であると。その「二種の科学の存在」を知らされた時は、さすが脳科学者は優れてことを言うと思った。しかし、その後にStephen Hawking (2010)を読み、そのような二種の科学の分け方は正しいとは言えないと学んだ。すなわち、彼によれば、物理学も多分に知覚認知主体と外の世界と関わりを抜きにして語ることの出来ない科学なのだ。

2.2 Stephen Hawkingが説く二種の物理学

更にまた Hawking はその著書の中で、物理には二種類あると説く。一つは誤った理論で、後一つは彼が唱えるところの正しい理論。前者は「Realism」と呼ばれるもの。ニュートンの万有引力の法則。あるいはアインシュタインの相対性理論がその典型例。「Realism」に基づけば、まず観

17-27.indd 19 3/21/12 8:53 AM

察者が居て、その観察者が外の世界を客観的に観察し、そして物理法則を作りあげる。他方後者の理論、すなわち「Anti-realism」に基づけば、我々は外の世界を「客観的な立場」から見ることはできない。実際に観察できる世界とは、「月」とか「太陽」とか「銀河系」といった概念に即したものではなく、原子・素粒子等とそれらの動きでしかない。それ故この「Anti-realism」の考えは、原子・素粒子レベルの世界に関わる量子物理学（Quantum Physics）の分野で勢力を持つ。言い換えるなら、それら二種の物理の違いとはマクロかあるか、それともミクロであるかである。ニュートン力学などの様にマクロな世界の存在を前提とするのか。それとも、量子論などの様にミクロなレベルで世界を捉えるのかである。そして、面白いのは、「Realism」を基にしたマクロ的な法則性は、多くの実験結果（experimental results）と対応するとは言えない。しかし「Anti-realism」に基づいたミクロ的な物理法則は、ありとあらゆる実験結果と対応するのである。

ともかくも、私が Hawkingから拝借しようとする概念は、彼が説く「Model-dependent Realities」と呼ばれるもの。それは、「いわゆる外の世界」は、観察者それぞれの視点によって異なるとの言うもの。それ故、物理学もまた知覚認知主体を抜きにしては語れない科学なのだ。この考えを明確に示すのが、彼の下の「丸い金魚鉢の中の金魚」の喩え。引用が長くなるが、重要であるので、全てを読んで貰いたい。

A few years ago the city council of Monza, Italy, barred pet owners from keeping goldfish in curved goldfish bowls. The measure's sponsor explained the measure in part by saying that it is cruel to keep a fish in a bowl with curved sides because, gazing out, the fish would have a distorted view of reality. But how do we know we have the true, undistorted picture of reality. Might not we ourselves also be inside some big goldfish bowl and have our vision distorted by an enormous lens? [underlined by Miyamoto] The goldfish's picture of reality is different from ours, but can we be sure it is less real?

The goldfish view is not the same as our own, but goldfish could still formulate scientific laws governing the motion of the objects they observe outside their bowl. For example, due to the distortion, a freely moving object that we would observe to move in a straight line would be observed by the goldfish to move along a curved path. Nevertheless, the goldfish could formulate scientific laws from their distorted frame of reference that would always hold true and that would enable them to make predictions about the future motion of objects outside the bowl. Their laws would be more complicated than the laws in our frame, but simplicity is a matter of taste. If a goldfish formulated such a theory, we would have to admit the goldfish's view as a valid picture of reality.

17-27.indd 20 3/21/12 8:53 AM

この考えに基づけば、例えば、地動説と天動説、どちらが正しいとは言えず、どちらでも物理学的モデルとしては成り立つのだ。ただ天動説を採用した場合には、その法則性を計算するのが、地動説を採用した時よりも複雑になるだけのことなのだ。

ともかくも、ここでの結論は、まったく客観的な世界を扱う学問であると思われている物理学でさえも、知覚認知主体、即ち、外の世界を見る視点を無視しては、外の世界を語ることはできないとのこと。

3. 臨済禅の世界

ぱっぱ・ぱっぱと支離滅裂にあちらこちらに飛ぶようであるが、ここでは禅の教えについて触れる。ここで取り扱う禅は禅の一宗派、「臨済禅」である。頼る文献は、創始者・臨済の語録を集めた臨済録（入矢義高訳注. 1989. 岩波文庫. 岩波書店. 東京）である。なぜ禅を理解する為に臨済禅に頼るのかと問われるなら、これほど仏教のエッセンスを伝えるものは大乗仏教にはないからだと答える。ここでは禅仏教の歴史的な事柄についてはまったく触れない。興味のある人はインターネットなどで調べればよい。Theravada 仏教の４５冊の教典（Ti-pitaka（lit. ‘Three-baskets’））とは異なり、臨済禅のバイブル・臨済録は薄っぺらな書物。しかし、そこには禅の教えが凝縮されている（Suzuki, 2010参照のこと）。そこに述べられていることは、私が見る限りでは、たったの三つ。すなわち、

1）「Here and Now」へのリマインダー
2）禅（仏教）の神髄
3）正しい修行法

それらを表すパッセージを以下引用する。まず「Here and Now」へのリマインダーを表す諸例は下の如く。

> 僧がやって来るのを見て、師は両手をひろげて見せた。僧が黙っていたので、師は言った、「わかったか。」「わかりません。」師「コンロン山はノミも受けつけね。わらじ銭ぐらいはくれてやるから出直して来い。」（p. 167）

> 師が僧に問うた、「どこから来たのか。」僧はすぐに喝した。師は会釈して僧を坐らせた。僧はもたついた。師はすぐ打った。

> 師は僧が来るのを見ると、払子をさっと立てた。僧は礼拝した。師はそこで打った。

> また別の僧がやって来るのを見ると、やはり払子を立てた。僧は見向きもしなかった。師はやはり僧を打った。（p. 152）

次に下が「禅仏教の神髄」を語る一例。

> 「諸君、心をいうものは形がなくて、しかも十方世界を貫いている。眼にはたらけば見、耳にはたらけば聞き、鼻にはたらけばかぎ、口にはたらけば話し、手にはたらけばつかまえ、足にはたらけば歩いたり走ったりするが、もともとこれも、心が六種の感覚器官を通してはたらくのだ。その心が無であると徹底したならば、いかなる境界にあっても、そのまま解脱だ。（p. 41）

そして、下が「正しい修行法」を語る一例。

17-27.indd 21 3/21/12 8:53 AM

ある日、王常侍は師を訪ね、僧堂の前で出会って問うた、「この堂内の僧たちはお経をよみますか。」「お経なんぞ読まない。」「では座禅をしますか。」師「坐禅もやらない。」「お経も読まず坐禅もやらないとすれば、いったい何をしますか。」師「かれらをみんな仏や祖師にならせる。」「『黄金の細片は貴重な品だが、眼に入ったら眼病を起こす』。いかがです。」師「これまでお前さんをただの俗人だとばかり思っていたが、(なかなかやるね)。」(pp. 165-166)

さて、それらの引用を引用のままにしておき、ここでは何ら説明を加えない。それ故、今この時点では、それらの引用文が含む意義が理解してもらえないと思う。しかし、次の第四セクションで、脳科学などの基礎概念を紹介し、そして第五セクションで「仏教とはボトルネック・モデル」であるとの説明を行う。それらの内容を理解してもらえれば、上の臨済録で述べられていることの意義が悟ってもらえるはず。

4. 心理学・脳科学から

次のセクションでの「仏教を理解するには三つの世界の違いを理解しなければならないと」、そして、「仏教とはボトルネック・モデル」であるとの主張を理解してもらう為の下準備として、ここでは、感覚(sensation)、知覚(perception)、そして認知(cognition)とは何かについて述べる。

4.1 感覚・知覚・認知レベル

外界からの情報の処理過程としては、通常、次の三つのレベルが想定されている。感覚、知覚、そして認知。まず感覚(sensation)とは目・耳などの感覚受容器に基づいた神経生理的な情報処理過程。このレベルでは、例えば、見ているものが何であるかはまったく分からない。網膜から送られて来た視覚刺激を、後頭葉(occipital lobe)の視覚野が受け取るが、見たものをひとかたまりとして処理し得るわけではない。まず、少なくとも、「カタチ」、「色」、「動き」に関わる情報に分け、その各々を個別に処理する脳領域へと送る。その後、統合を司る脳領域が、それらを束ねて、元の視覚情報に似たものに再構築する。

感覚レベルと知覚レベルでの情報処理過程は、連続的であり不可分である。しかし、基本的には、知覚(perception)は異なる感覚情報を統合する過程である。また、認知レベル程ではないにしても、それら統合された情報と過去の学習・知識・経験とを組み合わせる過程でもある。故に、知覚は、感覚処理のように外の世界を可能な限り丸写ししようとする様なものではなく、仮説と推論に基づいて能動的な判断を下すものである。

17-27.indd 22 3/21/12 8:53 AM

その仮説と推論の例が「知覚の体制化」と「知覚の恒常性」と呼ばれるもの。「知覚の体制化（ひとつのまとまりある知覚像の構築）」の最も基本的なものは「図と地の分化」。左の「ルビンの杯（人の二つの横顔と一つの杯の反転現象）」で示される様に、意味を持ち浮き出て見える部分（図）と、その背景となる部分（地）が分化する。この分化なしでは、我々は意味ある形や物を知覚することはできない。「知覚の恒常性」とは、外界からの情報を常に同一なものと知覚する働き。（例：斜め上から見た茶碗の淵は網膜では楕円と写っているはずだが、我々はそれを真ん丸と捉える。）この働きに助けられ、我々は、本来は始終変化し不安定であるはずの知覚世界を、安定したものとして捉えている。

認知（cognition）とは、感覚・知覚・記憶・推論・言語・欲求など全てが関わる情報処理活動。それは、知識を獲得し・組織立て・用いる、「知」と呼び得る働きの総称。また、感情（emotion）はここからは省かれるべきと言われていたが、状況は変わりつつある。

4.2 感覚と学習

ところで、理解してもらいたいことは、見ること・聴くこと・嗅ぐこと・触れること・味わうことの感覚能力は、「学習」して始めて獲得し得るものであるとのこと。それは、乳幼児の脳の発達と直接に関わる。乳幼児の大脳は、うっそうたる原始林にも喩えられる神経細胞の集合体。大脳以外での分布をも含め、我々の体内の神経細胞数は一千億以上と言われる。（神経細胞は我々の腸内にも存在する。アメーバーの様な単細胞生物よりも生存に適したヒドラの如き多細胞・腔腸動物が、五億年程前に地球上に現れ、そこから我々に至る生物の進化が加速した事を思えば、あたりまえとも取れる事実。）

大脳内での百五十億程もの神経細胞一本一本には、平均一万程のシナプ大脳内での百五十億程もの神経細胞一本一本には、平均一万程のシナプシス（神経伝達物質でもって神経細胞間の情報連絡を司る隙間）が備わっている。それらシナプシスの大脳内での総数は、成人では少なくとも10^{14}（100 trillion）と言われるが、乳幼児の10^{15}（1 quadrillion）のシナプシス数からすれば遙かに少ない。これはその後シナプシスが大規模に刈り込まれる（pruning）からだ。すなわち、ヘブの学習法則（Hebbian learning）と呼ばれる「firing together, wiring together」のメカニズムでもって、余分なものを取り除く課程のなかで、整然とした神経細胞とシナプシスのネットワーク（神経回路）が作り上げられて行く。そのネットワーク形成そのものが、見る・聞く・嗅ぐ等の能力をも含めた我々の感覚・知覚・認知能力なのだ。

ともかくも、ここで理解して貰ったであろうことは、まず、我々の外界からの情報処理は、感覚・知覚・認知の三レベルを想定し得る。そして、我々がまったくもって生得的な能力と思っている見ること・聴くこと・嗅ぐこと・触れる・味わうことは、実際には、「学習」なしでは得ることのできないものであるとのこと。

5. ボトルネック・モデルとしての仏教

ここで私の仏教理解について述べる。それは、上の情報処理モデルに対応するもの。また、その先で見たHawkingの「Anti-realism」とも対応するもの。更には、後で見るTheravada仏教、特にその論（Abhidamma）で説かれていることとも対応するもの。強いては、禅仏教とも対応するものである。

17-27.indd 23 3/21/12 8:53 AM

5.1 貧弱な知覚処理能力

我々が「いわゆる外の世界」を取り入れる時の大問題は、知覚処理能力の「貧弱さ」である。たとえば、眼から「直接に」取り入れることの出来るものは、網膜に映る単なる二次元の世界でしかない。その極端に貧弱な二次元的情報から我々は三次元の世界を構築する。しかし、これは、不良設定問題(ill-posed problem)と呼ばれ、数学的には絶対に解くことのできない問題なのだ。それにも関わらず、脳は始終その問題を、何の問題もなく、脳なりに、「解いて」いるのだ。言い換えるなら、我々が外に存在すると思っている三次元的な視覚の世界は、脳が自らの仮説に基づいて(かってに)造りあげる世界なのだ。

聴覚もしかりである。鼓膜に伝わって来るのは、単なる空気の圧力。そこで拾い上げられる音は「複合波・complex waveform」。内耳の蝸牛殻(かぎゅうかく・cochlea)において、複合波はそれを形成する simplex waveform にフーリエ変換(Fourier transform)される。そのバラバラにされた聴覚情報が大脳の聴覚野に送り込まれ、そこで元の複合波に(近いもの)に戻される。すなわち、単なる空気の圧力変動から、外の音の世界を構築するのが聴覚野の働き。ここでもまた、自らの仮説に基づいて外の音の世界が構築されるのだ。

それらから言えることは、脳は、極端に処理能力の劣った知覚処理の「肩代わり」を、常に、行っているのだ。この「処理能力の貧弱さ」を私は、「ボトルネック」と呼ぶ。図1での「くびれの部分」が、ボトルネック的な知覚処理過程を示す。くびれている故に、情報処理が貧弱なのだ。

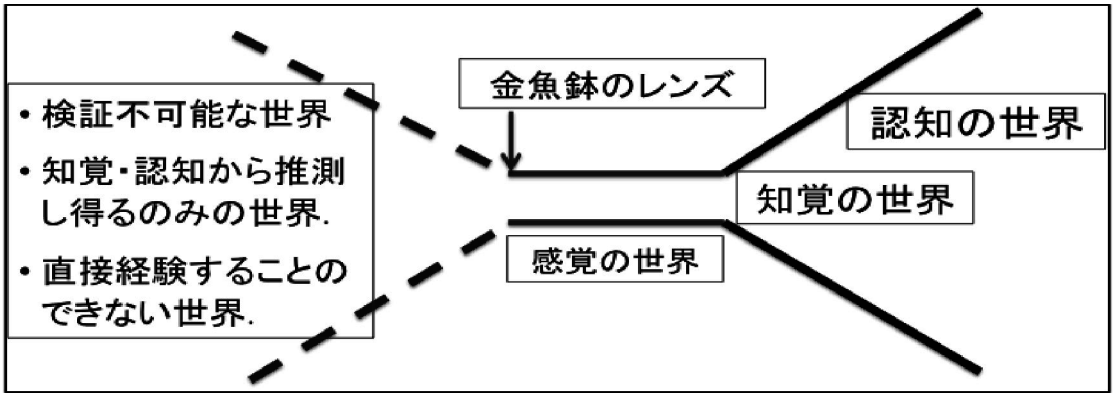

図1 感覚・知覚・認知の世界

17-27.indd 24 3/21/12 8:53 AM

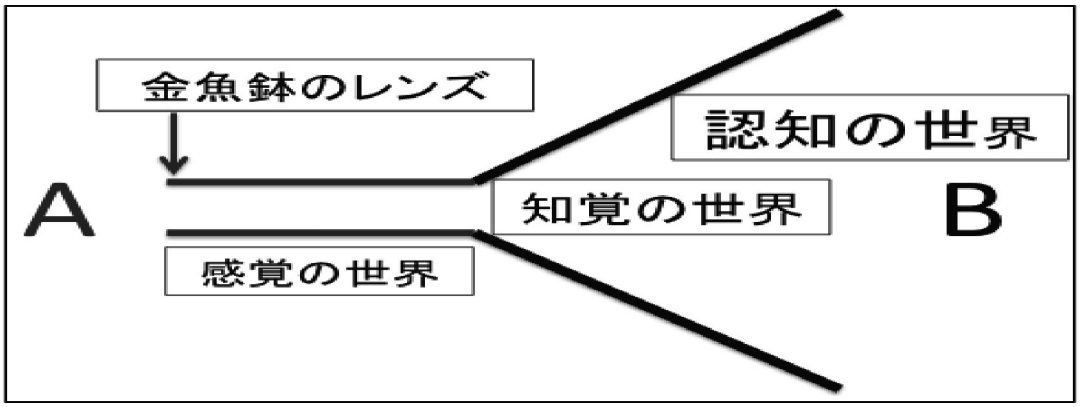

図2　我々もまた丸い金魚鉢の中の金魚

5.2 我々もまた「丸い金魚鉢の中の金魚」的存在

さて図2を見てもらいたい。これは Hawking の「丸い金魚鉢の中の金魚」の喩えに基づいて、図1を書き直したものだ。これは、先の引用で下線を引いた部分の意義に基づいてもの、すなわち、“Might not we ourselves also be inside some big goldfish bowl and have our vision distorted by an enormous lens?”。この図2に関して言えることは以下のことだ。

- 「いわゆる客観的な外の世界」は、「直接には経験することの出来ない世界」。それは、我々の知覚・認知から単に推測し得る世界でしかない。（それ故、図2では、それを示していない。）

- 実際に、「客観的な外の世界」が存在するか否かは、我々には検証不可能。なぜなら、ボトルネックの前の部分の存在を検証する手段を我々は持たないからだ。すなわち、我々は、この処理メカニズムの「外に立って」それを観察することは出来ないのだ。

- 物理学では、137億年前に起こったビッグバン以前の世界を語ることはない。それは観察不可能な世界。それ故に、語ろうとしても答えは返って来ない。答えの返ってこないことが分かっている問題を物理学者は問うことはない。同様に、ボトルネックの前の部分（A）は、推測はできるが、客観的に観察することは不可能なもの。なぜなら、我々はボトルネックを通してしか「いわゆる外の世界」を見ることが出来ないからだ。すなわち、金魚の様にレンズを通してしか、外の世界を観る事ができないからだ。

- ボトルネックの後の部分（B）での情報は、ボトルネック（A）での情報を元に、脳自らが自らの仮説と推論に基づいて造りあげたものでしかない。

さて、先でも少し触れたが、ここでの仏教的意義は何であろうか。仏教は極端に執着を嫌う教えである。もし、情報的には極端に貧困（impover-ished）な「Aでの世界」をハッキリと観ることができ

17-27.indd 25　3/21/12 8:53 AM

れば、「Bでの世界」との違いは歴然となる。それは、例えば、ステーキとか、異性とか、車とか、家とかの概念のまったくない世界。なんら執着に値するモノのない世界。それを見・体験することにより、「Bでの世界」に現れる人やモノに対する執着を断ち切ることが可能となる。これが、ボトルネックでの現象をあるがままに観ることの仏教的な意義なのだ。

6. Theravada 仏教の教え

6.1 釈迦に説法

「釈迦に説法(Lecturing to the Buddha)」という諺(ことわざ)がある。専門分野全てを知り尽くした人に対し、門外漢がその専門分野を説く愚かさを述べたもの。私がここで、タイ人に向かって、Theravada 仏教について語れば、それは、それこそ「釈迦に説法」。故に、ここでのTheravada 仏教の記述は、タイ人以外の人の為のもの。また極々簡略なもの。

6.2 Realties(Paramattha dhamma)の世界

Theravada 仏教を納める三蔵(Ti-pitaka)は次のもの。

- 律 (Vinaya(7冊))
- 経 (Sutta(25冊))
- 論 (Abhidhamma(13冊))

律(Vinaya)は仏教教団内での僧侶達の振る舞いに関わる規則などを述べたもので我々のスコープ外。経と論に関しては言えることは、経は輪廻に基づく倫理を強調する部門。他方、論は、瞬時・瞬時の現象をあるがままに観ることの重要性を説く部門。また、経は「概念に支えられたマクロな世界」。そこでの記述は全て概念に基づいたもの。それ故、「人」・「物」・「場所」などが付随する。他方、論は、「現象に支えられたミクロな世界」、「人」・「物」・「場所」などの様な概念とは関わらない。説かれるのは、現象(realities・paramattha dhamma (lit. 'absolute realities' in the Pali language))のことについてのみ。論は realities を、次の四種に分ける。

- Rupa (物質・もの)
- Citta (意識・知覚)
- Cetasika (精神要素・機能)
- Nibbana (涅槃)

Nibbana は日常経験し得るものではないので、スコープ外。繰り返す様だが、rupa・citta・cetasikaについて言えることは、それらは概念(concepts)ではないとのこと。Rupaの例は視覚器官(visual-sense)あるいは視覚刺激(visual object)。Cittaの例は、視覚(seeing)や聴覚(hearing)。Cetasikaの例は、嫌悪(aversion)や執着(attachment)。それらの何れもが、2ー3 msec.(1000分の2・3秒)の速さで現れては消え去る。

量子論では、原子・素粒子がこの世をつくる基本要素と見なされる。ちょうどその様に、論で扱われる rupa (物質・もの)、citta (意識・知覚)そしてcetasika(精神要素・機能)は、我々の瞬時・瞬時での経験における基本要素。(それら現象の全ては無常・無我・苦であるとブッダは説く。)故に、量子論と同様、論は realities に支えられたミクロな世界。

そして、ここで重要なことは、論が扱う世界は、上で見た図2の「Aの世界」と「Bの世界」での現象のみであり、我々が普通想定する「「Aの世界」

17-27.indd 26 3/21/12 8:53 AM

以前の世界」に関わるものではない。それは、直接経験し得るものではないとのことで、realities から成る世界とは見なし得ないのだ。

7. しめくくり

このトークで述べようとしたことは以下の様なことである。宗教的要素を除けば、Theravada 仏教も禅仏教も扱うのは、三つの「Hear and Now」の世界。一つ目は、「いわゆる外の世界」。これは、推論することは可能だが、直接には経験することのできない世界。第二番目の世界は、我々の感覚器官の処理機能の貧弱さが問題を引き起こす世界。この世界は、Hawking が喩えるように、丸い金魚鉢の中に住む金魚のレンズを通して経験する世界。第三の世界は、脳が自らの仮説・推論に基づいて、第二の世界から第一の世界を造り上げようとする世界。これもまたそのかなりは概念の世界。

認知科学としての仏教が強調するのは、感覚器官において直接に現れる第二番目の世界。しかし、これは、簡単には観ることのできない世界。なぜなら、我々の脳が常にそこでの貧弱な世界を別なもの、すなわち第三番目の世界、に書き換えているからだ。仏教の基本的な教えは、脳にだまされることなく、その情報量的には bottle-neck 的な第二の世界を正確に観ろとのこと。でもこれは、知恵なしでは観ることの出来ない世界。臨済禅のユニークさがあるとすれば、それは、Theravada 仏教の様な一大宗教哲学システムではなく、この世界を観る事のみに全勢力を注いでいるところ。

ともかくも、ここで、今一度、最初に行った実験を試みてもらいたい。少しは、「私が、私の右指で私の左指に触れている」との感覚が揺らいだであろうか。

References

Hawking, S.and Mlodinow, L. (2010). ***The Grand Design.*** London: Bantam Press.

Hawking, S.and Mlodinow, L. (2005). ***A Briefer History of Time.*** London: Bantam Press.

Suzuki, D.T.(2010). ***Zen and Japanese Culture.*** Bollingen Series LXIV. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

The Pali Text Society edition. ***Tipitaka (Vinaya-pitaka, Sutta-pitaka and Abhidhamma-pitaka).*** London: The Pali Text Society.

入矢義高訳注 (1989).『 臨済録』東京:岩波書店.

17-27.indd 27 3/21/12 8:53 AM